1．MOA 美術館って？　　どこにあるの？

MOA 美術館は、新幹線で東京から 39 分。JR 熱海駅を降りて山側に入ったすぐ丘の上にあります。正面玄関まで、タクシーで 5 分、歩いても（しんどいけど）15～20 分程で到着します。
英語名称は、**「MOA Museum Of Art」**。熱海にあるのに、「MOA」ってなに？って思うかもしれません。これは、**創立者、岡田茂吉の名前を取ったもので、「MOA」＝「Mokichi Okada Associates」という意味です。**

創立者の**岡田茂吉（1882-1955）**は、大正末期～昭和にかけて、新興宗教「世界救世教」を興した人です。彼はその一方で、美術にも非常に造詣が深く、宗教家として有名になる前は、日本画家を志して東京美術学校（現在の東京芸術大学）で学んでいました。

宗教家として成功したあと、岡田は日本美術を中心とした美術品の収集を進めていきます。そして、1952 年には、美麗な庭園が名物の「箱根美術館」をオープンさせました。

ついで、1982 年には彼のコレクションを全て網羅した、MOA 美術館を熱海駅裏に開館します。MOA 美術館は、開館から 35 年が経過し、建物の老朽化が進んだため、一旦 2016 年から改修のため休館していました。そして、今回ちょうど 2017 年 2 月から大幅リニューアル工事が完了して、再オープンとなりました。

MOA 美術館の特徴は、何と言ってもその**所蔵品に多数の国宝・重要文化財クラスの貴重な美術品を抱えていること**です。特に、毎年 2 月に公開している**尾形光琳の「紅白梅図屏風」や、専用の設置部屋ができた野々村仁清「色絵藤花文茶壺」は、美術ファンなら絶対見ておくべき一品です！**

2．リニューアルオープンした MOA 美術館の見どころ

2-1．とにかく明るくて開放的な館内

館内が、リラックスできる雰囲気かどうか、というのは美術館・博物館にとって非常に重要な要素だと思うのですが、**巨匠、杉本博司の全面監修の下リニューアルされた MOA 美術館は、とにかく館内が落ち着いているし、開放的な空間が心地良い！**

この MOA 美術館では、都心の美術館・博物館ではあり得ないほど広大な敷地を活かし、細部まで徹底的に快適さにこだわって設計されました。とにかく天井は高いし、展示スペースはゆったりしているし、敷地全体が癒やしのスペースとして気持ちよかったです。

また、窓際の景色も最高です。美術館の窓から見える**相模湾の海景は、アートなしで、この景色を見るために美術館に立ち寄ってもいいな、と思うほど素晴らしかったです。**単純に観光スポットとしてもイケているのですよね。

2-2. MOA 美術館所蔵品は写真が撮影し放題！

さらにすばらしいのは、このリニューアルオープン以後、**MOA 美術館の所蔵品は全面的に写真撮影が解禁になったこと。**国宝だろうが重文だろうが撮り放題です！もちろん、1 点撮り、接写も問題ありません

色絵牡丹文大皿（古九谷様式）

2-3. 映り込みしないガラスケース

美術館で結構きになるのが、ガラスケースと照明が反射して、人の姿が写り込んで作品がよく見えなかったりするケース。今回のリニューアルでは、そのあたりも非常に改善されており、**全面的に導入された高価な低反射ガラスケースのおかげで、驚くほどクリアに作品を見ることができます。**

実際、かなり目をこらして見てみないと、ガラス自体どこにあるのか全く見えません！もちろん、ガラス越しに写真を撮影する際も、まったく映り込みしなかったので、鮮明な写真を残すことができました。

2-5. 山麓口エントランスのエスカレーター～ホール

MOA 美術館には、山頂側の出入り口と山麓側の出入り口の 2 つがあるのですが、**そのうち山麓側の出入り口から入場すると、展示室まで 100m 以上に渡る長大なエスカレーターの回廊を上っていきます。**まるで神社の参道のようです。

そして、エスカレーターを乗り継ぐ中間地点には、**天井をスクリーンに見立てて、映像装置から万華鏡のように天井の映像がリアルタイムで変化していく巨大なホール状の踊り場があって、非常に幻想的でした。**実際にいろいろなイベントをここで実施するそうです。

MOA 美術館名物のこの長いエスカレーターの回廊は、ぜひ味わってみてください！なお、エスカレーターを 1 日動かしておく維持費だけで、毎日電気代が数十万円かかるそうです・・・。

3．気になった作品群

3-1．尾形光琳「紅白梅図屏風」

まず、何が何でも見ておきたいのが、**国宝「紅白梅図屏風」**。（※国宝・重文クラスの美術品は、法律で展示できる期間が限定されており、1 年に 1 回しか展示できない）

3-2．野々村仁清「色絵藤花文茶壺」

続いて、17 世紀に焼き物の世界で「京焼」を完成させ、プロの陶芸家として芸術作品を多数残した陶工、**野々村仁清の国宝「色絵藤花文茶壺」**も絶対見ておきたい所。

3-3. 洋人奏楽図屏風

最初これを見た時、「えっ、なにこれ？」と度肝を抜かれてしまいました。そこまで上手なわけではないのですが、遠近法を取り入れ、描かれた人物達の顔立ちは欧米人であり、どう見ても一見洋画にしか見えません。でも、よく見ると日本産の岩絵の具を使って描かれているんです。（※例えば「緑青」を使った緑色などは典型的）

左隻部分拡大

これは、海外で描かれた洋画ではなく、**ポルトガルやスペインの宣教師、商人を通して入ってきたヨーロッパの絵画などを手本に、日本の画家が洋風に描いた屏風**なのだそうです。19 世紀の幕末近くなってから秋田蘭画の画家たちや円山応挙、葛飾北斎などが描いたのであればまだしも、**これが 16 世紀の作品である、というのが非常に驚き**でした。

3-4. 勝川春章「雪月花図」

初期の浮世絵作家、勝川春章の手がけた 3 対一組の肉筆画。保存状態が非常に良く、しかも低反射ガラスでの鑑賞ということもあり、細部までくっきりと鑑賞することができました。浮世絵作家の肉筆画は、やっぱり素晴らしい！

3-5. 喜多川歌麿「桟橋二美人図」

同じく、浮世絵作家、喜多川歌麿による肉筆画。哥麿の肉筆画は、浮世絵以上にやわらかな表情と繊細な描き込みが大好きなのですが、この深川の川沿いでポーズを取る芸者を描いた肉筆画は非常に印象的でした。

3-6．黄金の茶室

豊臣秀吉が、その治世全盛期の頃、**1586 年に正親町天皇と宮中で茶会を開いた時に使われたという「黄金の茶室」を、昔の資料から再現して展示**したものです。

中に入ることは当然できないのですが、実際に中に入ったことがある学芸員さんの話では、黄金の放つやわらかい輝きや光は、決して派手になりすぎず、意外にも室内は静謐な雰囲気で満たされるのだそうです。

なお、このセットは以前に天皇家が視察に訪れた時、1 度だけ使用された実績があるそうです。

5．まとめ

伊豆箱根熱海エリアは、ポーラ美術館、岡田美術館など、見どころ満載の気合の入った「本気の」美術館が多く点在しています。そんな中、この MOA 美術館も、日本美術を中心として、多数の貴重なコレクションを揃えている上、開放的な館内でゆっくりと鑑賞できるという意味で、間違いなくアートファンなら一度は訪れておきたい美術館です。

熱海駅すぐという好立地もあり、アクセスも良いので、日帰り温泉や観光のついでにフラッと立ち寄ってみてもいいかもしれませんね。美術館から見える絶景も非常におすすめです！

http://blog.imalive7799.com/entry/MOA-Renewal-201702　より抜粋